

序論) 報われる人生

皆さんは何か仕事をするとき、報酬があるのと報酬がないの、どちらが良いでしょうか。

アメリカの IRF、インセンティブ・リサーチ財団が 2008 年に行ったインセンティブ、つまり、目標達成や意欲向上のための報酬の効果についての調査によると、物質的な報酬があるかないかによって業績が平均 22%違うという結果がでています。もちろん、良い結果をだしているのは報酬がある方です。しかも、個人に対する報酬の効果は 22%の業績向上ですが、これがチームでの報酬になると最大 44%も業績が改善したという報告があります。

さらには M-NIC CRC のケーススタディによると、「ありがとう」とか、「あなたの仕事は素晴らしいね」といった物質的な報酬ではない感謝のことばや称賛によって仕事の生産性が 88.8%も向上したという報告もあります。88.8%という数字はとんでもない数字です。感謝や称賛をことばにするだけで、それほど相手を励ますことができるのならば、私達は「ありがとう」とか、「すごい」といった肯定的なことばをもっと使っていく必要があるのではないのでしょうか。

みなさんは、職場や家庭において感謝のことばや、称賛のことばを表現しているのでしょうか。

私達は、報いがあるとわかるとそれだけでやる気がでたり、結果を残せたりするのです。そうであるのならば、私達キリスト者の人生にも「ちゃんと報いがある」ということを知ったならば、私達はどれほどキリストに従う人生にやる気をだせることでしょうか。

みなさん、教会では奉仕とか、犠牲を払うとか、無条件の愛とか、そういった言葉をよく使いますが、でも、私達のクリスチャン人生はちゃんと報いのある人生にすることができるのです。では、どのようにして私達はキリスト者として報いのある人生を過ごすことができるのでしょうか。今日は聖書から、その方法を教えられていきたいと思えます。

前回の振り返り)

まずはいつも通り、前回の復習をしましょう。

前回の箇所、パウロはコリント教会の人々を肉の人、キリストにある幼子と表現

していました。それはコリント教会の中に妬みや争いがあり、パウロ派、アポロ派といった派閥争いがあったからです。彼らは御霊によって十字架のことばを受け入れることができ救われたはずなのに、その後は肉の人として歩んでいたのです。だから、パウロはコリント教会の人々を御霊に属する人のように扱って堅い教えを話すことができなかつたと述べていました。

1) アポロとパウロの役割 -大切なのは成長させ、報いてくださる神-

今日の箇所ではまず、その分裂・分派をしていた人たちにパウロやアポロが何者であったのかを述べています。5節、6節を読みましょう。

3:5 アポロとは何なのでしょう。パウロとは何なのでしょう。あなたがたが信じるために用いられた奉仕者であって、主がそれぞれに与えられたとおりのことをしたのです。

3:6 私が植えて、アポロが水を注ぎました。しかし、成長させたのは神です。

ここでパウロはなんと言っているのでしょうか。彼は、自分たちはそれぞれの派閥のリーダーではなく、教会の人々が信仰を持つために用いられた奉仕者だと述べています。ここで奉仕者と訳されていることばは、第三版ではしもべと訳されており、元々の意味としては食卓の給仕をする身分の低い人のことを指しています。

パウロやアポロたちは、【主】から与えられた賜物にしたがって、キリストの福音を人々に届ける仕事をしているしもべなのです。

ここでパウロが自分たちのことを身分の低い者であることを強調していることに注目していただきたいと思います。

パウロにしても、アポロにしても優れた説教者でした。でも、どんなに優れた説教者であったとしても、その人を派閥のリーダーにはいけないのです。

最近 YouTubeなどで非常に説得力のある牧師の話を聴くことができます。

それ自体は、良いことだと思いますが、その牧師の一種のカリスマにのめり込んでその牧師が言っていることを基準にして、自分の教会の人々をさばいたり、牧師を批判したりするような人が出てきているという話を聞くことがあります。

でも、その先生方もパウロたちと同じように【主】に賜物があたえられて、【主】の福音を人々に届けるための給仕をしている一奉仕者に過ぎないのです。決して私達に力を与え、霊的に成長させてくださる方ではありません。

大切なのは、私達を実際的に成長させてくださる【主】なのです。だから、パウロ

はいいます。7節を読みましょう。

3:7 ですから、大切なのは、植える者でも水を注ぐ者でもなく、成長させてくださる神です。

みなさん、みなさんを霊的成長させるのは、私のメッセージではなく、説得力のある説教者のことばでもなく、【主】なる神様 一人なのです。

私達、説教者はみことばの種をまきます。でも、その種を実際的に成長させてくださるのは、みなさんの中に生きて働かれる御霊なる神様であり、【主】なる神様であり、キリストなのです。だから、大切なのはみことばの種をまく人に依存することではなく、それを成長させて良い実を实らせてくださる【主】にみなさんがしっかり結びつくことなのです。

だから、パウロやアポロ、そして、それよりももっとも小さいものである私や、優れた説教をされる説教者の方々は、その【主】のために共に働く同労者であり、みなさんは、神様の畑であり、神様の建物なのです。パウロが8節、9節でこのように言っている通りです。

3:8 植える者と水を注ぐ者は一つとなって働き、それぞれ自分の労苦に応じて自分の報酬を受けるのです。

3:9 私たちは神のために働く同労者であり、あなたがたは神の畑、神の建物です。

注目していただきたいのは、8節でパウロが「自分の労苦に応じて自分の報酬を受ける」と言っている点です。これは教職者が受ける教会からの謝儀のことではありません。これは【主】からの報酬のことです。【主】は、私達の労苦をちゃんと見ていてくださり、それぞれの働きに応じてちゃんと報酬を用意してくださっているお方なのです。

みなさん、時には神様からの報酬を受けることを利己的だと考え、まるで良くないことのように考える人がいますが、それは間違いです。

私達が人からの利益を求め、人間的な報いにのみり込むとき、それは罪を孕むことに通じる道となりますが、【主】からの報いを期待し、そのことを信じていくことは聖書が私達に教える正しい道なのです。

実際、タラントの例え話や、ミナの例え話を思い出してみてください。良い忠実な

しもべに対して主人は、どうされたでしょうか？ なんの報いも与えなかったでしょうか。いいえ、良い忠実なしもべだと、その人のことを評価し、その働きに応じた報いを与えています。また、ヘブル人への手紙にはこのようにも書かれています。

ヘブル人への手紙 11章6節

11:6 信仰がなければ、神に喜ばれることはできません。神に近づく者は、神がおられることと、神がご自分を求める者には報いてくださる方であることを、信じなければならぬのです。

神様は、私達が、神様がおられることと、その神様が求める者に報いてくださることを信じることを喜んでくださるお方です。

だから、私達は、【主】がちゃんと報いてくださるお方であることを信じて期待していくべきなのです。

パウロは当然のこととして、その【主】の報いを信じていました。

2) 報いを受け取るための注意点

問題は、その【主】からの報いを受け取るためには注意すべき点があるということです。10節を読みましょう。

3:10 私は、自分に与えられた神の恵みによって、賢い建築家のように土台を据えました。ほかの人がその上に家を建てるのです。しかし、どのように建てるかは、それぞれが注意しなければなりません。

① キリストだけが唯一の土台

パウロは、神様から与えられた恵みによって賢い建築家のように土台を据えたと言っています。

この「与えられた」と「据えた」ということばは、言語的には、アオリストというものが使われており、アオリストというのは「ある時点で完了した動作や出来事」を示すものです。つまり、パウロはすでに完了したキリストの救いという恵みを与えられて、その恵みによってコリント教会の人々に土台を据えるという働きをすでに完了しているのです。

そして、その土台とは何かというとイエス・キリストです。

どんな牧師や説教者に導かれたとしても、福音という種まきがなされ、救われた人は、すでにその人の中心にキリストという確かな土台が据えられた状態であるのです。それは問題が多いコリント教会であったとしても、そして、私達であったとしても同じです。キリスト者はみんな、キリストという確かな土台が据えられているのです。この土台は他のものに変えることはできません。キリストという土台だけがキリスト者を支えるものなのです。

みなさん、【主】からの報いを受けるための注意点の1つ目は、私達の土台はキリストであるということです。パウロでも、アポロでも、それ以外のどんな優秀な説教者でもなくて、キリストだけが唯一の私達の土台である。ということです。

② どのように建物をたてているか

だからこそ、報いを受けるために注意しなければいけない事の2つ目は、このキリストという土台の上に、どのように建物を建てているか？ ということです。もう一度10節後半を読んだ後、12節、13節を読みましょう。

3:10b しかし、どのように建てるかは、それぞれが注意しなければなりません。

私達は、どのように土台の上に建てるのか「それぞれが」注意しなければいけません。そして、12節、13節

3:12 だれかがこの土台の上に、金、銀、宝石、木、草、藁で家を建てると、

3:13 それぞれの働きは明らかになります。「その日」がそれを明るみに出すのです。その日は火とともに現れ、この火が、それぞれの働きがどのようなものかを試すからです。

12節の「金、銀、宝石、木、草、藁」の一つ一つに特別な意味を考えなくてもいいと思います。大切なのは最初の3つが高価で燃えないものであり、後半の3つがそれほど安価で燃えるものだけということです。

私達が、キリストという土台の上に価値があるものを建てあげるのか、それともあまり価値がないものを建てあげるのか。それが問題だということです。

なぜ、それが問題なのでしょう。それは、キリストという土台の上にどれほどのもの

のを建て上げたのか、それを試す日が来るからです。神様は、私達の人生の成果を試す日を予定されているのです。それがいわゆる、裁きの日とか、最後の審判の日のことです。【主】は、その日に「それぞれの働きがどのようなものか」を試されるのです（13節）。そして、その試しの結果は次のようにして見分けられます。14節、15節

3:14 だれかの建てた建物が残れば、その人は報いを受けます。

3:15 だれかの建てた建物が焼ければ、その人は損害を受けますが、その人自身は火の中をくぐるようにして助かります。

みなさん、みなさんは今、キリストという土台の上に、人生をかけて何かを建てあげている状態です。そのみなさんが建てあげている物が、【主】の試しの火によって燃え尽きてしまうものなのか、それとも残るものなのか。それによってみなさんが報いを受けるのか、受けないのかが変わります。

【主】によって高価とみられるもの、金や銀のように扱われるものをキリストという土台の上に積み重ねているのならば、みなさんが人生をかけて建てあげた建物は残るでしょう。しかし、【主】の前に高価とみられないもの、価値がないものを建て上げたならば、その建物は燃え尽きてしまい報いではなく、損害をうけることになってしまいます。

では、【主】の試しの時に燃え尽きない高価なもの、燃え尽きてしまう無価値なものは何なのでしょう？ 先週お話しした御霊の実は当然高価なものでしょうし、肉のわざは無価値なものでしょう。でも、それだけではなく、【主】の前にへりくだった心や、【主】を信じるきる信仰、そして、実際的に【主】に従う従順も、【主】の前に高価なものだと言えらると思います。それとは逆に、偽善的な礼拝であったり、愛のない行動、高慢や、人に見せるための施しや祈りは、聖書的には無価値なものとしてされています。

そして、私がこのメッセージを作る中で思い出させられたのは、イエス様がお話された砂の上に家を建てるのか、岩の上に家を建てるのかの例え話です。

イエス様は、みことばを聞いて行わない人を岩の上に自分の家を建てた人に例え、みことばを聞いても行わない人を、砂の上に自分の家を建てた人に例えられました。

そして、砂の上に建てられた家はつぶれ、岩の上に建てられた家は残るのです。

それは、今日のみことばと共通しているところがあるのではないのでしょうか。

私達は、キリストという土台がすでに据えられています。

だから、例え、その日に、【主】の試練の火によって私達が建て上げたものが燃え尽きてしまったとしても、私達のいのち、【主】イエスキリストによって与えられた永遠のいのちは尽きることがありません。私達の霊的ないのちは助かるのです。

結論)

みなさん、キリストによって永遠のいのちが保証されているとしても、どうせなら、【主】からの報いを豊かに受けたいと思いませんか？

【主】は、私達の人生の労苦に豊かな報いを用意してくださっているお方です。そうであるのならば、報いのある人生を歩むために 2 つのポイントに注意しましょう。

一つ目は、キリストという土台の上をしっかり立ち、それ以外の土台を据えないようにすることです。例えどんなに優秀な説教者であったとしても、みことばを上手に語る人であったとしても、キリストという土台の代わりにはなりません。キリストの上をしっかり立つものになりましょう。

そして、2 つ目の注意点は、キリストという土台の上にどのような建物を今建てようとしているかに注意をしましょう。

肉のわざや、高慢に陥ること、毎週の礼拝をしても偽善的な礼拝をしていたり、愛のない行動をしていたとしたら、それは【主】の試みの火に燃やされるものを建てあげていることになります。そうならないために、私達は、燃えない建物、【主】の目に高価な物をつみあげる人生を歩んでいきましょう。御霊の実を实らせ、へりくだって歩み、最後まで【主】を信じ切り、そして、みことばを実践していく。それこそが、【主】の前に価値ある物を積み上げ、燃え尽きない建物を建てあげることに繋がるのではないのでしょうか。

★応答の時

今、静まり、みことばを反芻して応答のときを持ちましょう。